

論文

曹禺「明朗的天」における「思想改造」の描き方について

On "MING LANG DETIAN" — How did Cao Yu describe the
scenes of "Ideologicak remoulding"

坂 野 学

SAKANO Manabu

[抄録] 現代中国の劇作家曹禺の建国後初作品「明朗的天」について、「思想改造」の状況をどのように描いたかを考察する。曹禺は「思想改造」に賛同するのだが、この作品で、集団による運動の場面をことごとく舞台上で再現していない。しかし、それは曹禺の見識とみるべきであって、けっして批判すべきものではないことを提示する。

[キーワード] 中国話劇 曹禺 思想改造 朝鮮戦争

曹禺の話劇「明朗的天」の創作契機については、従来全集第7巻に収録された「曹禺談《明朗的天》の創作」により、曹禺が思想改造の一貫としての現場視察学習に参加した後、その感想をある領導幹部に話したところ、知識分子の思想改造を主題とした話劇をつくることになった、ということが知られている。またその領導幹部とは周恩来のことだとされている。1)

その後、完成した話劇「明朗的天」の上演を周恩来が観に来たときの様子は、「我們心中的周總理」「獻給周總理的八十誕辰」にもとづいて考えられていた。それは、1954年に周總理が北京人民芸術劇院にきて、「明朗的天」を観終わった後、劇員と談話していた時のこと。周恩来は曹禺に対して、資産階級の思想があるから、自己点検（「検査」）をなさいと命じた。自己点検をするときは、聞きにくるから連絡しなさいとも言われたが、曹禺は自己点検をしたものの、周恩来には知らせなかったので指導を受けられず後悔している、という内容だ。2)

ところが、その後、田本相が『曹禺年譜長編』の中に、全集には収録されていない文章「不容抹煞的十七年」を掲載して、従来より詳しい情況を示した。3) なお、この文章の出拠が明示されていないので扱いに躊躇してしまうが、WEBサイト「亦凡公益図書館」の「曹禺文選」に登録されており、そこには「原載《光明日報》1977年12月7日」と明示されている。4)

観劇の様子を記した部分を以下に訳して引用すると

1955年春節の前夜、周總理は政務に多忙な中、私を書いた知識分子の思想改造に関する脚本『明るい空』の上演を見にいらっしゃった。終演後、時間はもう遅かったが、周總理は俳優、監督、スタッフ全員と話し合いました。そのときは、ちょうど毛主席が『紅樓夢研究問題に関する手紙』を発表され、ブルジョア知識分子が青年を損なう間違った思想を批判しようと号令を出したときでした。北京人民芸術劇院の大衆はこの批判運動を烈火の如く行いました。敬愛する周總理はみんなの前で私に言いました。「曹禺、きみはちょっと考えてみなさい、きみの頭の中にはブルジョア思想はあるのか。私はあると思うよ。きみは率先して点検しなくてはいけない（当時、私は北京人民芸術劇院の院長でした）、きみが点検をするさいには、私に知らせてくれ、私が聞きに来るから」と。当時、私はとても光栄に思うと同時に、少し怖くも思いました。うまく説明で

きないじゃないのかと心配でした。その当時私は「自己批判」がどういうものを分かりませんでしたし、うまく言えなくて、周総理を怒らせてしまうと思ったのです。

その後、私はいいやいやながら話しました。私はこの点検はなっていないと思いましたし、大衆もけっして満足しなかったでしょう。

点検の前に、周総理には知らせませんでした。周総理は四六時中中国革命と世界革命という大事に忙しいので、こんな小さな事で総理を煩わせてはいけないと思ったのです。いま振り返りますと、ほんとうに後悔は及ばずです。私はメンツを大事にしすぎて、とうとう敬愛する周総理の突っ込んだ教訓を得なかったのです。もしあのかたが私に知らせていたら、総理は聞いたあとに、私を批判したかもしれません。でもそれは私に対して、なんと大きな教育であり、なんと大きな幸福だったであらうでしょうか。これは私が一生涯残念に思っていることなのです。

この文章では、曹禺が自己点検に消極的で、あまりよいとは言えない点検を周恩来に知らせずにやってしまったが、それはだらしない自己点検の内容にきっと周恩来は怒るだろうと思ったからだ、と述べている。

この観劇後、曹禺は脚本の三度目の書き直しを行ない、それが現在通行する三幕ものの話劇「明朗的天」である。周恩来が観たものとは異なる。

本論では、現行の三幕「明朗的天」をもとに、思想改造がどのように描かれているかを考察する。考察する立場としては、あえて現在からの視点を多くとることとする。というのは、「抗美援朝」スローガンがまだ冷めないイデオロギー華やかな時代の状況に視点を同調させると、結局は当時のイデオロギーでしか作品を語れないことになってうからである。曹禺は当時の政治情況から外れないように人物を配置しストーリーを構成している。当時描いた理想的人物の造型が、現在の目から見れば陳腐でしかなかったり、否定的に扱われた人物の言動が、むしろ現在では関心を寄せるものであることもあり得よう。建国後の曹禺の作品は政治におもねったということもあって評価が高くないが、政治の枠をはめながらも、そこからはみ出るものがあることに注意したい。

上に「不容抹煞的十七年」をひいたのは、自己点検に消極的な曹禺を「思想改造」劇の中に読み取りたいからにほかならない。「明朗的天」については、依拠した当時のことがらの問題等の重要な論点もあるのだが、本論ではひとまず、どんなふうに「思想改造」を描いているかということに絞って、人物設定とあわせてそれぞれの場合を論じることにする。

ここでは主な登場人物それぞれの「思想改造」体験を考察する。

その前に、建国直後にはじめられた「思想改造」とはどのようなものだったのかを、運動を日本でいち早く紹介した訳文集『人間革命』に寄せられた安藤彦太郎による解説文から「思想改造運動のやり方」という部分をひいて確認しておきたい。

あらゆる大学、学校、機関、職場に、学習小組といった名まえでよばれるサークルが組織されていった。このサークルで、まず共同学習の計画が相談され、マルクス＝レーニン主義、毛澤東思想の文献を、個人的に順序だてて読んでゆくほかに、座談会、検討会、あるいは集体討論会といわれる集団的な批判会がもたれ、さらに機関なり、学校なり全体の集会がひらかれる。数ヵ月のちに、思想総結という学習の総決算をみんなが提出するが、これも、この全体の集会で討論される。つまり一種の、うちあけあい運動であり、率直に自分の過去のあやまりや、げんざい到達した気持ちを、みんなでうちあけあい、たがいに批判しあうのである。なお、学習の期間内に農村や工場に行って、現実のなかから教訓をくみとる努力もはらわれる。5)

ここで安藤は、集団による学習会や批判会を総じて「うちあけあい運動」と表現している。この『人間革命』は1950年と1951年の文章が主なので、運動の初期は「うちあけあい」のようなやわらかなものだったのだろう。朝鮮戦争が始まり社会主義化が急速に進められると、次第にやわらかさを失い、批判が厳しくなっていき、文化大革命の時期に見られる暴力をともなう集団による糾弾へとエスカレートしていった。

この作品が創作された時期の運動のあり様は、「明朗的天」の内容からみて、

集団による批判会では批判対象に対してその人格や存在を否定するような激しい罵声が上がるようになっていたと考えてそれほど誤りはないだろう。

それでは、以下に登場人物のうち、集団による批判を受けた人物たちをとりあげて、曹禺の書き方を考察する。

（１）宋潔方の場合

50歳前後の女性外科医で、未婚。最も早い時期に英米の医学教育を受けた女医のひとりとされる。中国国内の英米系の医学校で学んだのだと思われるが、どこで学んだのかは書いていない。「英米の」という書き方から、この作品の舞台となる燕仁医院ではないだろう。正義感にあふれた人物の性格と積極的な行動は、『蛻変』の外科女医丁大夫を思い出させる。

主人公となる凌士湘とは古くからの友人で、解放後に新しく院長として赴任してきた董観山とは、以前観山が重傷のところを何昌荃のたのみで治療したことがある関係だ。董観山を彼女は「同志」と呼んでいることから、彼女も共産党員だと思われる。（ただし、董観山は宋潔方を「宋大夫」と呼び、何昌荃を「昌荃」と呼んでいるので、明確ではない）

宋潔方がいつごろどういう理由で燕仁医院に勤務するようになったのかはわからない。

ある座談会で凌士湘を激しく非難して、凌士湘が途中で退席してしまったとき。
（第2幕第1場 1952年7月 凌士湘の家）

凌木蘭 さっきの座談会では、私ほんとうに頭にきたわ。みんながいまではジャクソンがどういう人物かわかったというのに、お父さんひとりだけがジャクソンを弁護しているのよ！宋おばさん、おばさんがお父さんに反駁するのは正しいわ。

宋潔方 言い方がきつかったのよ、どうしても押さえられなくってね。
私の話を聞き終わったら、あの人立ち上がってどこかへ行っちゃった

わ。あの人もきつとずいぶん辛いのよ。

凌木蘭　辛くさせておけばいいのよ。お父さんの思想も少しは変化するんだから。

宋潔方　そうね、きつと苦しんでいるはずよ。自分の思想を改めるのは簡単なことではないのよ、私も経験したことがあるけど。あの人はひとりでどこへ行ったのだろう、実験室にもいないし。

木蘭と宋潔方は凌士湘の家で、座談会から突然姿を消した凌士湘が戻って来るのをまっているところだが、会話の中で、宋潔方が以前に思想改造を受けたことがあり、とても辛い経験であったと回想している。その経験がいつどこで行われたものなのかも、どうしてそんなに辛いのかも明らかに説明をしていないが、少なくとも彼女がかつて苦しんだような辛さを凌士湘が味わっているのだと思い遣っている。そこに凌士湘が戻って来る。

宋潔方　士湘、私も以前はあなたと同じように、ジャクソンは学者であつて、人を殺すはずがないと思っていた。でも、今は事実が明らかにならんでいるわ、私の以前の見方は間違っていたって気づいたのよ。それはどうやったところで、認めるしかないのよ。それなのに今日あなたはあくまでジャクソンを弁護して、ジャクソンがあの労働者の奥さんを実験にすることははずがないとあくまで言い張るんだから！ 私の言い方もちょっと批判が厳しくなってしまったわ、それも医院全体の医師たちや教授たちの前で、あなたは怒ったでしょう・・・

（凌木蘭が緑豆スープをもってくる）

凌士湘　（いぶかしげに）怒ったって？そんなことないよ。

宋潔方　怒っていない？

凌士湘　いないよ。今日はまるっきり話したくはなかったんだ。みんなが話せと言うから話ただけだよ。みんなが自分に賛成してくれないことは知っているよ、私だってみんなに賛成してほしいとは思っていないんだから。

宋潔方　わたしたちがあなたに賛成するって？みんながあんなに長い時

間話したっていうのに、あなたは考えてみないの？

凌士湘 （無造作に）何を考えるんだい？私は正しいんだ、なにか考えることがあるのか？

他者に同調することを良しとしない凌士湘は、他者に対して自分に同調することも求めない。こうした凌士湘の態度をこの当時の「思想改造」運動では、アメリカ式の「個人主義」「自由主義」と攻撃していた。その「思想改造」の根底には、教条としての「矛盾論」があった。定立→否定→総合という弁証法が正しい運動法則として信じられていて、矛盾を探し出して否定をさけび屈服させるというのが議論のみちすじであった。古いタイプの科学者である凌士湘には、そのような弁証法が正しい考え方だとは思わなかっただろう。

ともかく、ふたりの会話からふたりの考え方（思想）がまったく異なるものであることがわかる。集会での「議論」をまったく意に介さない凌士湘に対して、その「議論」こそ真実に到達する道だと信ずる宋潔方は、大勢の同僚の前で凌士湘に激しい批判のことばを浴びせてしまう。集団が言動をエスカレートさせる働きをもつことをよく表している。

（2）凌士湘の場合

1949年に59歳の設定だから満59歳のことであれば、1890年の生まれとなる。1891年生まれ胡適や1892年生まれ郭沫若とほぼ同年の人物と想定できる。清末に救国のために科学を学び、のちにアメリカに留学し働きながら学んだ。医学は人を救うためという人道主義を思想とする。性格は強情で、まっすぐ。ただし狭い見方に固執して、なかなか考え方を変えないところもある。アメリカから帰国後、開業はせず、ずっと教学を担当し、いくつかの大学で授業を受け持ったあと、最後に燕仁医院に勤め、10年になろうとしている。細菌学の主任教授。

ここで、やはり気になるのは燕仁医院に1939年ごろに赴任したという設定である。燕仁医院のモデルは協和医院だが、盧溝橋事件（1937年）後、協和医学院は日本に接収されている。日本接収時代を経て、アメリカによる再経営時代、そして共産党側の接収という時代を送ってきたことになるのだが、日本接収時代

の影は一切ないのである。6)

さて、凌士湘は、共産党の統治を認めるが、党の活動には強い不満をもっている。党员である助手の何昌荃が趙王氏の死体不明事件の調査に奔走していることをめぐって口論となる、第1幕第2場では、

何昌荃 (立ち上がって、同情して) この病人は死んでとてもかわいそうです。ご主人は目が見えないし、そのうえにのこされたこどもが4人ですよ。

凌士湘 (長い間があつて)それは不幸なことだ。(まじめに) 病気と死は我々が征服しなければならない敵だ。きみに何度も言ってきただろう、(しだいに高ぶってきて) 我々の一生は人を救うことだ、人を救うにはしっかりと研究するしかないんだ。奉仕とは我々にとっては、一切を放棄して、努力研究することなのだ。人が死ななくてよいものになるには、病気が治るものとなるには、我々がまじめに仕事にとりくむことが大事なんだ。一日中談話と宣伝ばかりじゃだめなんだよ。

何昌荃 凌先生、もしある医者がこの患者をまったく治したくないと思って、そしてその患者を実験の材料として、技術を獲得する手段としたとしたら、人はどうして死なないことが可能になるんですか？病気はどうやったら治ることが可能なんでしょうか？凌先生、御存知ですか、わたしたちはアメリカ帝国主義が経営して半世紀になろうとしている病院のなかにいて、わたしたちの思想も長年のあいだ彼らの影響を受けてきたのです・・・

凌士湘 (不満げに) きみはアメリカ帝国主義をこの医院と関連づけないではいけないのか？それに私の思想がだれかの影響を受けている、とかいわないでもらいたい！言うておくが、私は現在の政府に満足しているし、共産党を擁護してもいる。しかし、私はきみの宣伝は聞きたくないんだ。このことはきみがあの人、董院長にもそう伝えておいて欲しい。

二人の間で医療についてと党の活動について率直に言い交わされている。ここ

での凌士湘の言動は、集会における他者に同意を求めないというものではなく、対話における相手である何昌荃に対して、自分の言うことに同意してそれに従って欲しいという要求である。

凌士湘の言うことが正しいのか、何昌荃の言うことが正しいのかはさておいて、ここには相手の存在を認めたくて相手を動かそうとする確かな意思というか願いがあるように思える。それは、集会においてある特定対象をひとつの目標の下に屈服させようとする激しい言動とは異なる性質のものであろう。

上の対話のあと、董観山院長が現われると、凌士湘は「思想改造」活動への参加免除を願い出ている。

凌士湘 ……。もうひとつお願いがあります。ご存知の通り、私はもう六十歳になりました、もう何年もありません、仕事を急がなければならぬんです、もう怠けてはいられません。だから、董院長、正式にお願い致します。もうこれ以上私に報告を聞けだとか会議に出ろとか言わないでください。(ふと考えて) とりわけ彼、何医師に言ってください、一日中私に宣伝をしたり、政治について話したりして、これ以上私の時間を浪費させるなど。以上です。いまおこたえしなくて結構です、それでは失礼いたします、すぐに計画書を持って参ります。(下がろうとする)

凌士湘が自分の研究を政治活動に優先させることをあからさまに要求することは、この当時においてはかなり危険なことであったと想像される。学生や医師教師を政治活動を遠ざけることが、協和医院の方針として強く批判されていたことが、当時の資料からわかる。7) 何昌荃らの立場から見れば、こうした態度は「アメリカ帝国主義文化」に完全に染まってしまって自覚すらない典型的知識分子ということになる。

凌士湘の董院長への直接の要求は、かなえられるはずもない。(1)に見たように第2幕第1場の集会の場で、ジョンソンを擁護したために孤立してしまい、座談会の方から立ち去る事態になったのである。

座談会で凌士湘の考えを改めることに失敗した結果、党はやり方を変え、凌士湘を「反細菌戦展覧会」の準備工作に参加させ、事実でもって凌士湘の改造を促すことにした。凌士湘は、当初「細菌戦」そのものを「宣伝」として信じていなかったが、しだいに変化していく。そうした中で、ジャクソンの患者の事件で新たな展開が起きる。腕に虱がはいった箱を縛り付けられて、痒くてたまらなかったという話を患者から直接聞いた、というかつて燕仁医院で働いていた担当看護師が見つかったのだ。彼女はその話を患者が亡くなる前に孫栄医師に話したとも言っている。この時点で、孫栄はジャクソンが患者を殺したことを凌士湘等に打ち明ける（第3幕第2場）。

凌士湘は、この孫栄の告白を得て、はじめて自分の考えが間違っていたことを認めることになる。そして、当初は「細菌戦」を疑っていたが、その現実を認め、科学者が非人道的な残虐行為をすることがあると認識を改めることとなった（同幕同場）。

上記の場面はすべて凌士湘の家の客間で演じられる。つまり、自分の過ちをみとめ考え方を変えることは親密な私空間で行われていることを再度確認しておかなければならない。

ただし、孫栄の告白でもって、事件の事実経過の確証が科学的に得られたのかというと、強い疑念はこのころ。そのことを凌士湘も作者曹禺も気にしていないようだが、そのことについては、別の機会の考察に譲りたい。8)

（3）尤曉峰の場合

33歳の眼科の主治医。解放後にも院内で英語を使い、アメリカ文化信者で、技術は確かだが、周囲から好意的に見られていない。燕仁医学院の卒業生ではないために、燕仁の学閥派やジャクソンに親しい医師たちから距離を置かれている、という人物設定になっている。

抗米という劇の内容からいえば、否定的に扱われるべき人物ということになる。第1幕第1場の開幕すぐに、英文タイプしか打てない劉茉莉のところにやってきて英語をしゃべるのが彼で、否定すべき滑稽なアメリカ信者という役どころとなっているのが如実にわかる。

第1幕第2場では、工場で両眼を負傷したために医院にやってきた労働者趙樹徳に対して、両眼は治療しようがないので帰宅するよう命じている。第2幕第2場では、朝鮮の戦場で片目を負傷した莊政治委員が手術後に炎症がでたときに対応が騒動となる。

陳洪友（緊張して）莊政委の眼が炎症を起こしたぞ。

尤曉峰 誰が言ったんですか？

凌木蘭（苦しそうに）私がたった今診たんです。黄先生を呼んで診てもらいましたが、炎症です。

尤曉峰（わけがわからない様子で）それはおかしいじゃないか！

陳洪友（怨みがましく尤曉峰にむかって）きみたちはどうしたのだ！経過は良好だと言ってたじゃないか。

尤曉峰（しきりに弁解して）経過はよかったんですよ。木蘭に聞いて下さい！

木蘭は言わない

尤曉峰 手術はすべて正確でした。私がそばについてました。炎症については誰も保証できませんよ。私のせいなんですか、それとも木蘭のせいなんですか？

陳洪友（あせって）わかっているのか？彼は義勇軍だぞ！義勇軍なんだ！きみに言っておいただろう、手術を勝手に若い医師にさせるなって、若い医師はそういうふうに育てるものじゃないんだよ。

尤曉峰（すばやく）でもあなたが申告を承認したんですよ。

凌士湘（凌木蘭に）炎症はひどいのか？

凌木蘭（声を低くして）深刻です、視力はもうだめです。

陳洪友 ペニシリンは出したのか？

凌木蘭 出しました、飲んだのを確認しています。

尤曉峰（気を落として）う～ん、それがなんの効果がある？炎症が起きてしまったら、ほかにどんな方法がある？結局行き着くところはひとつ、失明だよ！

凌木蘭（いらだって苦しそうに）いまからそういう風に考えちゃいけない

いんじゃないですか？

尤曉峰 （相手にせず、かえって大きな声で）それが科学さ、そう考えて悪いのか？言うておくが、眼はだめになってしまったんだ。でもそれはわれわれ医者のせいなのか？（雄弁になって）彼の目の中の弾片に細菌がついていたのかもしれない、途中で薬を交換するときに不注意で細菌がついたのかもしれない、空気感染によって、どこからか細菌が来たのかもしれない。（凌士湘を指して）凌先生にお聞きします、細菌が炎症を引き起こす可能性は一万種類あるっていいますよね。まさかわれわれがすべて責任を負わなければならないんですか？

凌木蘭 （感情的に）でもこれは莊政委の眼なのよ！私のせいなのよ、私が手術をした後で、こんなことになったんだから。

まずは、莊政委の眼の炎症についてだが、論者の多くはこれを凌木蘭が起こした医療事故と見做して、その上で尤曉峰の事態に対する無責任な態度を叱責している。たしかに作者の曹禺自身がこの箇所について医療事故と言っているので、そういう見方が一般的であるのは理解できる。しかし、では具体的にどんな医療事故なのか、と再考すると、およそ答えに窮するのではないか。

尤曉峰の手術の際には問題がなかったという発言を否定できる根拠はありそうにない。尤曉峰があげる他の要因も否定できないもののように素人目には見える。凌木蘭もはじめは手術がうなくいったと思っていたのだし、これといって間違ったところあったとは思っていない。原因は不明だが、術後に炎症がでたなら執刀者に責任があると思っているだけである。

間違いを恐れずに言えば、もしこの出来事を医療事故として理解させるためには、そのたしかな証拠をきちんと書き込むべきであったと思う。

たしかに尤曉峰の医師としての姿勢は、凌士湘とそれとは比べものにならないくらい倫理観が欠如している。患者側からすれば腹立たしい物言いにほかならない。

さて、莊政委の炎症の治療にあたって、尤曉峰と凌士湘が対立する。第3幕第1場、莊政委の病室の場面である。治療に当たってはまず細菌の培養をしてその

結果を待たなければならないが、症状は深刻でペニシリンだけでは押さえられないので、緊急処置が必要になっている。

董観山 細菌の培養結果はまだ出てこないし、ペニシリンもまだ効果が出てこない、しかし状況は待ってくれないぞ、なんとか方法を考えなくては。

尤曉峰 （我慢仕切れずに説明する）董院長、医学はですね、科学です。一定の医療過程と慣例があります。

董観山 （強調して）尤先生、いま患者の状態は急速に悪化している。

陳洪友 そうです。尤先生、あなたの意見は・・・

尤曉峰 （こだわって）ペニシリンを使うだけだと思います。

董観山 （期待するように）ほかに方法はないのか？

尤曉峰 （肩をちょっとすくめて）ありません、ないのです。

凌士湘 董院長、私に意見があります。一般的な状況では、ペニシリンは効果的ですが、ペニシリンでは治せない病原菌もあるのです。このような緊急の場合には、私の意見ですが、ペニシリンの効果を見るのを待たずに、すぐにストレプトマイシンも投与するのです。

尤曉峰 （不機嫌に）でも凌先生、先生は臨床医ではありませんよ。あとでカルテにどう書くのですか？誰が責任を持つんです？

董観山 （たまらずに）尤先生、カルテが大事なのか、それとも患者が大事なのか？陳先生、この2種類の薬を一緒に使って、副作用は出ないんでしょうか？

陳洪友 出ないはずですが、避けるべきことにはなっていません。

尤曉峰 （諷刺する言い方で）でも患者の細菌の培養はまだ出来ていないんですよ、病原菌が見つからないうちに別の薬を投与するっていうのは、あまり科学的じゃないですよ？

董観山 （怒って）何が科学だ？実際問題を解決できるのが、科学だと思う。凌先生が出した方法は患者に害はなく、効く可能性がある。害がなくいいことがあるというならやってみるべきだ。われわれの関心は人なのだから、医療の過程や慣例じゃないんだ！（尤は無言）どう思う、

陳主任？

陳洪友 正しいと思います、まったく正しいです。董院長、そういうふう
にしましょう。

董観山 じゃあそうしよう。

凌士湘 董院長、そう決定するのが正しいです。

陳洪友 尤先生、ちょっと相談がある。(尤曉峰を引っ張って行く)

莊政委の眼は、尤曉峰の反対を押し切って、凌士湘の意見に従ってストレプト
マイシンを併用した効果が出て、完治した。また、趙樹徳の両眼は、凌木蘭が執
刀して角膜移植手術を行い、これも両眼が見えるように回復することとなった。

尤曉峰の処方はいずれもはずれてしまった。医院には尤曉峰の医療思想を激し
く批判する壁新聞が貼り出され、人々の怒りを買うことになった。

そうした中で、尤曉峰は凌士湘の家に木蘭を訪ねてきた。

凌木蘭 尤先生。

尤曉峰 (力なく) ああ、あなたがたはみんなここにいたのですか。さっ
き病棟に行って、みんながお見舞いに来ていたと知りました。あの人
たちがふたりともよくなって、とてもうれしく思います。木蘭、あな
たにおめでとうを言いに来たんですよ。じゃあ帰ります。(身を返す)

凌木蘭：(こころをこめて) お座り下さい、尤先生。

尤曉峰 (戻って来て腰掛け、帽子をテーブルにおく) 何先生、私はとて
も辛いんです、私が医者の中のゴミだとみんなに罵られることはやり
きれません。はじめの数日はあまり受け入れませんでした。今、莊政
委と趙さんがそれぞれふたりともよくなったのを見て、私ははじめて
私の思想の中身が・・・ゴミなんだと、ほんとうに掃き捨てなければい
けないものだと思います。(ぼんやりと立ち上がって、歩き出し、
ふいに) 私の帽子は？

凌木蘭 (彼に渡して) ここです。

尤曉峰 ありがとう。

尤曉峰退場

何昌荃（ちょっと考えて）陳主任、先生は尤先生に話があるんじゃないですか？

陳洪友（うれしそうに）そう、そう。尤先生！尤先生！（振り向いて何昌荃に、声をひくくして）私が尤先生を引っ張って我が家に連れていきますよ！（退場）

医院全体からその考え方を厳しく批判された尤曉峰は愕然自失するが、それでも自尊心をкаろうじてくずさず、治療のしようがないと申し渡したふたりの患者に会いに行き、角膜移植手術を成功させた凌木蘭に祝福をしに家を訪ねた。

壁新聞の前に集まる人々とは違って、凌士湘の家のこの私空間は尤曉峰に対してこまかな気遣いがなされている。陳洪友は「今回の教育を経て、彼（尤曉峰）はきっと改めると信じるよ」と言っている。尤曉峰はたしかに壁新聞で激しく批判され、人々からゴミ呼ばわりされることを辛いと感じているが、彼のことを信じれば、辛いから自分を改めようと思ったのではない。そうではなくて、治療できないと判断した患者が完治したことを見て、自分の処方間違いだと認め、医師として失格だと判断したということである。これは、いわゆる相互学習的な「思想改造」とは異なるものである。

（4）孫栄の場合

32歳の内科主治医。燕仁医学院の卒業生で、能力があって早い出世となった。

第1幕第1場で、眼に負傷を負った趙樹徳の手を引いて燕仁医院にきた趙樹徳の妻趙王氏に孫栄が気づき、かつて趙王氏の軟骨病治療に当たっていたジャクソン院長に報告したことから、事件ははじまった。趙王氏は全費用免除で入院治療となり、ジャクソン院長の治療をうけるのだが、共産党軍に包囲された北京からジャクソンはアメリカに帰国することになる。軟骨病はとても珍しく、ジャクソンは趙王氏を標本にしようと発疹チフスに感染させ殺害し、目的通りに標本として箱詰めにしたが、アメリカに持ち帰ることはできなかったのか、標本箱を院長室においてそのまま帰国してしまった。

趙王氏が殺害される前に、孫栄はある看護師から趙王氏のことの報告を受けていた。趙王氏は紙箱を腕にくくりつけられた後とても痒くなって、紙箱を払ったら虱がたくさん出てきた、ということを看護師に話したのだという。それからすぐに趙王氏が亡くなり、その死亡を孫栄が検査してカルテには「発疹チフス」と書いた。ところが、そのカルテをジャクソンが「肺炎」と書き直した。ジャクソンの行動が怪しいと思った孫栄は教務長の江道宗に相談。江道宗から口外しないように言い渡され、会合で事件の真相を問われてもずっと真相を漏らすことはなかった。

孫栄が事件の真相を告白するのは第3幕第2場の凌士湘の家の場面である。そこにちょうど江道宗も居合わせて、上記のようなできごとの内容が語られることになる。ただし、この真相については、前日の夜に開かれた内科会の場で、みんなの前ですべて話していた。その場面は描かれないが、つぎのように前の日のことを語っている。

凌士湘（憤って）きみはどうして早く言わなかったんだ？なぜだ？

孫栄 患者の家族が病院を訪ねてきたときは、恐ろしかったんです。私はばかでした、政府のことも分からず、ただずっと江先生を崇拜していたので、先生に方法を考えてもらったんです。

江道宗立ち上がって逃げ出そうとする。

孫栄 帰っちゃいけない！

江道宗あきらめて立ち止まる

孫栄 で、彼は言ったんです（江道宗に向って）「話しちゃいけない、話せば全部だめになる。医院の名誉、ジャクソン先生の名誉、それにきみ自身さえこのままではいられなくなる。」江先生は本当に忠実でした、ジャクソンの罪行については一言も話ませんでした。それにジャクソン先生は学者だと言っています。

陳洪友 なにが学者だ！

孫栄（打ち明けて）三年間やりきれない思いでした。昨日の夜私は内科会の場で、みんなの目の前で、全部話しました。でもみんなはお前な

んかもういらないとは言いませんでした。みんなは私を迎え入れ、励ましてくれました。私は今までこんな深い教育を受けたことはありません。凌先生、私の話は終わりです、帰ります。(江道宗に) どこか真実でないと思ったら、おふたりの先生に話せばいい。(退場)

孫栄は、内科会場でそれまでけっして打ち明けなかったジャクソンの罪行をすべて話した後の、予想していない受け入れぶりに感動している。「思想改造」活動を「深い教育」として高く評価している。

それにもかかわらず、孫栄がどうして三年間の沈黙を破って、真相を語ることになったのか、再度確認しておく必要がある。三年間真相を語れと責められ続けて、堪えきれず観念したのだろうか。それとも教育的指導により彼自身の思想に変化がおきたのだろうか。そうではない。

虱の件を孫栄に報告したかつての看護師を何昌荃らが見つけ出し、まもなくみんなの前で証言することになったからである。その看護師が証言する前に、真相を話さなければ自分の立場がなくなってしまうからなのだ。第一原因はけっして「思想改造」の「教育」ではなく、言い訳できない「事実」の存在にあるのである。

(5) 江道宗の場合

46歳、燕仁医学院の教務長。ジャクソン院長に次ぐ地位にあるが、実質では一番の力を持っている。没落名家の子弟で、貧しかったが、大学時代に財家の娘と結婚して経済的な支えを得た。アメリカに留学して2つの博士の肩書をもつ。教養をもった上品さがある一方で陰があって、信用できない面がある。凌士湘には慇懃な下士官のような態度で接し、いつも「老先輩」と呼んでいるが、実際は誰をも尊敬せず、つねに野望をいだいているといった人物設定である。

ジャクソンの事件においては、ジャクソンが患者を殺害して標本処理したものの保管を江道宗に委ねたようだ。それを知っているのは江道宗のほかに孫栄だけで、孫栄には固く口止めを指示している。董院長はじめ党に近い人たちから江道宗に疑念の眼が向けられるが、孫栄とは全く異なり、動揺を見せることもなく平

然として振舞っている。

「思想改造」との関連でみると、第2幕第2場の江道宗の自宅内で、大衆の前で自己点検をしようと考えて、その予行練習を党員である甥の何昌荃にみてもらっている。

江道宗 ……（何昌荃に）さきほど私の方から董院長に申し上げたのですが、私は大衆のみなさんに向って自己点検をいたしたいのです。昌荃、私は最近自分の根本的な問題がわかったよ。（心をこめて）これはまったく董院長があの日啓発してくれたことなのです。私にはたしかに二面性がございます。革命性をもっていますし、また保守性ももっています。革命性をもっていますから、私は医院におけるこれまでのさまざまな腐敗をずっと強く憎んで参ったのであります。しかし、私には保守性もございますから、私はこの医院を一新することがずっとできませんでした。私のこのような二面性の根源は私が典型的なプチブル階級だからなのであります。（小休止、まじめに）おまえ、どう思う？

何昌荃 おじさん、おじさんの二面性をもう一段深めて話したらいいと思うよ。けど大衆は、おじさんにはジャクソンの二面性をあばいてもらいたいだろうね、ジャクソンの正体がどんなものであるか、おじさんは全部知っているんだから。

江道宗 彼の正体を私が知っているはずはないじゃないか。彼が私に教えてくれるはずはないだろう？（激しく何昌荃の手をつかんで）昌荃、党は私を信じるべきだよ！

江道宗は、董院長から批判された「二面性」という面を逆手にとって、肯定的な面と否定的な面を明らかにして、反省を表すと同時に期待を得ようという作戦なのだが、何昌荃からはすでにその手の内は見透かされているようである。江道宗のように肯定否定の両面をとりあげて、なんとか自己点検を済まそうとした知識人たちは少なくなかっただろうと推測できる点で、ことさらにこうした作戦を軽蔑しようとは思わない。むしろ、新政権との間になんとか折り合いをつけてい

こうとする積極性に感心したほうがいいだろう。

ところが、すべてがジャクソンの罪行のすべてが明らかになった後の、第3幕第2場では、凌士湘との次のようなやりとりがなされる。

凌士湘 （いらだって）そんな高邁な政治理論は分らん、孫先生が言ったことがいったい真実なのかどうかだけ話してくれ。

江道宗 （おちついて）その問題は、簡単だ。あなたたちお二人には答えたくない、今後も大衆の前で何の弁解もするつもりはない。動機が理解してもらえないなら、弁解しても意味がないから。

凌士湘 （江道宗を見て、にわかに江道宗が黙認している全てのことを理解して、震えて）そういうことなら、ジャクソンが人を殺したのは本当なんだな！ああまったく、これ以上何を言ったらいいんだ！こんな人間は何だってやっちゃうんだよ！私の研究もきっとアメリカ帝国主義に利用されたんだ。みんな私がおろかなせいだ、本当にバカの極みだ！

江道宗 （同情の顔つきで）自分を責めすぎない方がいいよ。細菌戦は予想外のことだった、科学者として、われわれはみんな心を痛めているよ。戦争はもともとのすごく恐ろしいものだ。でも戦争が始まれば、お互い誰彼かまっていられなくなる。こっちがこの武器を使えば、あっちはあの武器を使う。人道か人道でないかも言っていられなくなるんだ。

最後になって江道宗は弁明を拒否するようになる。動機を理解してもらえないことがその理由だ。では、この場合の動機とはどういうものだろう。ジャクソンの罪行を黙して言わないようにしたのは、党側が言うように江道宗がアメリカ帝国主義の手先で、燕仁医院が再度アメリカ資本の運営に復帰して、江道宗自身もそのトップにつこうと考えていたからなのだろうか。中米交流が成立すれば自分たちにふたたび重要な役割がやってくるという展望をいだいたことを根拠とすれば、たしかにそうした一面がなかったとは言えない。が、もう一方でジャクソンから運営の維持を依頼する手紙をもらったときに、憤っていたことからすれば、

アメリカ資本の運営に復帰することは断念していたとも見做せる。共産党新政権の中で、従来の自分たちの権益をなんとか保持していきたいというのが、できる最大のことであっただろう。それ以上の野望をいだいていたとは考えにくい。こうした中での動機とはなんだろうか。

今一度、江道宗の後半の発言に注目してみよう。たとえばあっちがああ武器をもった動機はなにかという場合、こっちのこの武器にやられないようにということになるだろうが、つまるところああ武器をもつのはよくないことだが、ほかに仕方がないということなのではないか。人道と非人道では人道であるべきなのはわかっているが、非人道を行うしかない場合があることを江道宗は言いたいのだろう。イデオロギーや理想主義は、その曖昧さを許そうとしないが、現実には江道宗的な立場はむしろ通常だといっていい。

董観山は、次のような結論を下す。

董観山 江道宗はアメリカ帝国文化侵略の道具であるが、彼はアメリカ帝国文化侵略の最も典型的な結果でもある。アメリカ帝国主義は彼を損なった、しかし人民はそれでも彼を教育する、われわれは彼に改造のチャンスを与えようと思う。

曹禺はこの董観山のことばを表出するために、江道宗を再教育の望みがある程度の悪人として描くことにしたと述べている。

21世紀の現在、この作品を読んで、上の董観山のことばと江道宗のことばのどちらに納得するだろうか。

総じて、現在の目で見るとき、「思想改造」運動は、結局のところ権力側への同調を求めるものでしかなく、集団の力学を通して、同調しないものへの激しい攻撃がなされるように変化していき、多くの犠牲者を生み出す原因となってしまった。かかげた目標自体は悪くなかったが、そのやり方がずさんだった。この点で、「思想改造」をよしとしながら、具体的な集団活動の場面を排除してその活動の意義を強調しなかったのは、作者曹禺の一見識とみなせよう。

3 結びにかえて

小論の結びにかえて、1955年農曆除夜到北京人民芸術劇院において周恩来が四幕劇「明朗的天」を観劇したときの様子を、当時の劇院スタッフだった梁秉堃による文章「老同学，我将了你一軍！」にもとづいて、再考したい。なお文章題について説明すると、「ふるくからの学友よ、私はきみに王手を打ってひとつきみをこまらせてやろう」というほどの意味である。

さて、文章は「1954年12月31日の夜」という日付から書き出されるが、文中に周恩来の言ったことばとして「今日は陰曆の除夜だから・・・」と記されていることから、この日付はあくまで陰曆（農曆）であって、西曆では1955年1月23日にあたる。

一にあげた曹禺の伝えるものよりも、そのときの事柄が細かに記されていて、周恩来が劇院スタッフに給与や待遇の問題や住居の問題など劇院の現状の聴取りをしていたことがわかる。そして、話劇の上演数がまだ少ないことを指摘して、話劇大会が開かれるのかを曹禺に確認した後、次のようだったと書いている。

周恩来はひきつづき「それでは、話劇大会の前にまず思想工作をやらなければなりません。この院長であるきみが自己点検報告をして面目を施してもらいたい」と言いました。曹禺は聞きながら頷いていました。周恩来は語気を強めて言いました、「きみは院長です、自己点検ができるなら、ほかの人の点検もできるでしょう、率先してやりなさい。・・・」9)

曹禺のものにはどこにも書かれていないが、梁秉堃によれば曹禺自身の自己点検（「検査」）だけでなく劇院の人員の点検をも求められていたことになる。曹禺は自分の行った点検を、あまりよくないものと評価しているが、そこにはあるいは劇員に対して厳しい評価をためらうということも含まれていたかもしれない。少なくともこの時点の曹禺は戦闘的なボルシェビキになれない知識分子であることを自認して恥じてもいたのだから。10)

さらに梁秉堃は、座談会が終わってから、周恩来が劇院を去って行くまでのことを次のように書いている。

座談会が終わった後、周恩来は休憩室を出て、庭にやって来ました。わたしたちもみんなその後についていきました。周恩来はまた曹禺に言いました「きみたちが書いたものは私に寄越せばいい。劇院院長、監督、俳優、党組織各方面が書いて私に寄越しなさい。きみたちの問題を私に書いて寄越すんだよ、十日です、待っています」と。周恩来はそう言いながら五本の指を伸ばして前後にちょっと揺らして、「十日」という意味を示しました。

まっすぐ周恩来は自分の自動車の方に歩いて行きましたが、やはり振り返って言いました「老同学、今日はどうやらきみをちょっと困らせることになったね」と。11)

曹禺には口頭報告と文書報告が求められたほか、劇院各部署にも文書報告が求められていたのである。それも10日という短い時間内である。たしかにこうした要求のまえに曹禺はひどく困ったことだろう。曹禺だけでなく、劇院もそうである。

しかし、どうして周恩来はこんなおそらくは無理な要求をしたのだろうか。俞平伯・胡適批判がはじまって、資産階級意識に対する攻撃が激しくなるだろうからというのは当然あっただろうが、この文章に見られる余裕からすれば、「明朗的天」が「思想改造」を扱っておきながら、自己点検報告会のような核心部分を一切描いていなかったことに周恩来が怪訝に感じたからではないだろうか。

【注】

- 1) 田本相 劉一軍編 (1996) 『曹禺全集』第7巻 花山文芸出版社 p 267～p 268
- 2) 同 『同』第6巻 同 p 367、p 372
- 3) 田本相 阿鷹 (2017) 『曹禺年譜長編』(上) 上海交通出版社 p 511
- 4) www.shuku.net:8082/novels/mingjwx/caoyuzpj/2/cy24.html
- 5) 安藤彦太郎 (1952) 解説「人間革命はどのように行われているか——中国の思想改造運動について」II 思想改造運動のやり方 (梁漱溟 張東蓀 艾思奇『人間革命——中国知識人の思想改造——』中国資料社 p 3- p 4)
- 6) 若田泰「中国・河北から東北の旅 日本軍の遺した生物・化学兵器の傷跡を追って」第2回 1855部隊と北京・抗日戦争紀念館」(www.fukushiroba.com/magazine/book/travel/china/040709_china.html) が参考になる。
なお、科学者の戦争協力という事実に対しての凌士湘の無知ぶりはあまりにも非現実的であり、凌士湘の発言を白けたものになっている。
- 7) たとえば鄧家棟「我們要批判過去「協和」的一切」(『医務工作者必須進行思想改造』華東医務生活社 1952年 p37)
- 8) 事件の解決を司法から政治にゆだねるという構成にしたため、事件の経緯が不明確なままになっている。このことは、演劇という特殊な時間空間の設定の効果によって隠されている。
- 9) 梁秉堃 (2012) 『舞台後面的好東西』西苑出版社 p 14-15 p
- 10) 同 1) p273
- 11) 同 p 15

なお、本文の引用テキストには人民文学出版社の『曹禺戲劇全集』第四巻を用いた。これは1957年7月出版の人民文学出版社初版に元になっている。